

# 19世紀西洋人による中國語動詞の把握

## —— エドキンスによる結果補語構文の分析を中心に ——

千 葉 謙 悟

### 0. 序言

近年西洋資料が多数發掘・紹介されるに伴ってこれらを利用した中國語の歴史的研究も多数現れてきている。主要な西洋資料及びそれに關する論考の一覽には石崎・鹽山・千葉(2011)、官話音研究における西洋資料の紹介・位置づけ等については千葉(2015)が挙げられるが、これ以後も精力的に研究が進められている。英語資料のみならず、他の歐語で記された資料も分析対象として取り上げられつつあるのは、この分野の研究の擴大を示すものだろう。しかし、個々の資料を分析する横糸としての研究は高まりを見せているものの、年代の異なる諸資料を通觀して、中國語におけるある現象がどのように把握され、理解されてきたのかを検討するという縦糸としての試みはいまだ緒についたばかりのように見える。一つの文法現象を軸として中國語研究を通時的に検討することも、中國語研究史の深化のためには必要な作業であろう。

そこで本文ではこの空隙を埋めるための試みの一つとして、西洋人による中國語研究、特に動詞連續の把握過程を検討する。周知の通り、動詞連續構文は中國語を特徴付けるものとして長い間大きな注目を浴びており、現代においてもさかんに研究されている<sup>1)</sup>。本文では特に動補構造、中でもいわゆる結果補語構文<sup>2)</sup>がいかに記述されてきたかを跡づけることを目的としたい。實はこの構造が発見され検討の対象とされるようになった背景には、後述するように西洋人による中國語研究があった。

また本文の採用したアプローチ、すなわち統語現象が把握されてきた歴史を検證するという試みは、中國語文法學史研究における新たなアプローチでもあるといえよう。これまでの中國語研究史の主流は品詞分類學説の變遷をたどる

ものであった。しかし中國語文法研究において品詞分類が中心的なトピックであったのは1920年代前半までであり、それ以後は品詞分類に對し特記すべき大きな変更はなされていない。それ以外のトピックについて、中國語文法學史研究はまだ十分な跡づけをしていないように見える。當時の西洋人は形態變化を缺いたままの動詞連續を中國語に特徴的な統語現象とみなした。例えば本稿で中心的に取り上げるイギリス人來華宣教師ジョセフ・エドキンス (Joseph Edkins, 1823-1905) は以下のように述べている。

(1) They [= Chinese verbs] take the form of a gerund or of an English present participle 我說無用 *wo shwo wu yung*, my speaking is of no use. 吃完 *c'hi wan*, finished eating [...] Chinese verbs have the marks of primitive antiquity. They are without sharply defined tenses such as aorists and futures. Nor are they furnished with inflections for the persons or to distinguish moods. Chinese verbs are unchiselled fragments, fresh from the quarry.<sup>3)</sup>

〔中國語の動詞ではジェルンド即ち英語の現在分詞の形式を「我說無用」「私の話は役に立たない」、「吃完」「食べ終わった」のように表す。…〔中略〕…中國語の動詞は原始的な古代性の印を有しているのだ。それらはアオリストや未來形と言った、高度に洗練された時制を持たない。また人稱や法の區別のための屈折をすることもない。中國語の動詞は輪郭のはっきりしない斷片であり、採石場から切り出してきたばかりの石のようなものだ〕

ここでは、英語であれば *speaking, eating* のごとく動詞を現在分詞に變化させて表すべき内容が、中國語では動詞や動詞句を何の語形變化も經ずにただ並べるだけで表現できるということを述べている。エドキンスが「我說無用」と並んで「吃完」を擧げているのは動詞連續、中でも結果補語構文が彼の興味を引きかつ最も典型的な例と捉えられたからに他ならない。また、エドキンスは中國語の動詞について「輪郭のはっきりしない斷片の集合」であるという。つまり、中國語動詞の意味はそれに後續する動詞や形容詞によって範圍が限定されることで確定するということを、彼は後述するように極めて精確に把握していた。

以下ではエドキンスの理解を中心として、まずエドキンス以前の研究を

5 種取り上げる。18世紀のウェアロ（Francisco Varo）とプレマール（Joseph Henri Marie de Prémare）、1810年代のモリソン（Robert Morrison）とマーシュマン（Joshua Marshman）、1820年代のレミュザ（Jean-Pierre Abel Rémusat）である。次いで1850年代のエドキンスの研究成果を分析し、彼が結果補語構文研究の進展について大きな役割を果たしたことを指摘する。同時に、エドキンスが参照した先行研究についても言及するだろう。最後に、それまでの議論を整理し文法學史上におけるエドキンスの地位を再確認したい。

## 1. エドキンス以前

### 1.1. ウェアロとプレマール

16世紀後半以降、來華カトリック宣教師の中には中國語を研究し文法書にまとめる者があった。19世紀以前の文法書の代表として、ウェアロの *Arte de la lengua Mandarin*（『官話文典』（1703）。以下『文典』と略稱）とプレマールの *Notitia Linguae Sinicae*（『漢語割記』（ca.1728）。以下『割記』と略稱）を取り上げる<sup>4)</sup>。

まず『文典』であるが、ウェアロはスペイン語語法に引きつけて解説する傾向があるため、「V完了」の形がスペイン語の大過去に当たるとされる。例えば「我去睡時節念完了」「寝る時私はすでにお祈りを済ませていた」<sup>5)</sup>。また「V完了/成了」が未來完了の印であるとされ、「Jesu 聖名瞻禮，聖堂宮都做完了」「イエスの名において、私は聖堂を建て終えているだろう」という例がある。いずれも結果補語構文の中では「V完了」「V成了」の二種類が時制との関係で注目されていることがわかる。

ついで『割記』を検討する。プレマールは大量の例文を通じて學習者自身が中國語を體得することを重視しているので、動詞についても既存のヨーロッパ諸語の文法書の枠組みに沿った、時制・法・態などについての詳細な注記はない。ただ口語を扱う第一部のうち、第一章第一節第三項は中國語の動詞一般について極めて簡略な説明を載せる。そこおよび他の箇所には結果構文を含んだ例文がいくつか見えるが、特段の注記はなく例文のラテン語譯のみが與えられている。例えば以下。

(2) 明日都做成了 [私は明日にはすべて完成させる]（千葉 2005a : 122）

(3) 休教他看見〔彼に見せることは許されていない〕(千葉 2005b : 122)

上の二例において(2)は「了」が未來の出來事についても使われることを解説する例、(3)は『割記』第一部第二章第二節における否定詞「休」の解説である。ここでは「做成」「看見」のような構造が現れるがそこへの注意は促されていない。

現代の視点でいう結果補語構文に言及があるとすれば、動詞に後續する「了」「過」「有」「完」が過去時のマーカーであることを述べるくだりであろう。その中で「完」について「寫完了」「私は書き終えた」という例が見いだせる<sup>6)</sup>。これはウェアロと同様の理解であろうが、『割記』ではヨーロッパの文法體系に寄り添って大過去や未來完了のように細かく時制を分割して解説するようなことはせず、過去を表すしるしであるという以上の分析はなされていない。『割記』はプレマールが重要とみなした語を多数取り上げて細かく用例を観察しており、結果補語を含む例文も少なからず出現する。しかしそれらへの注意は見いだすことができず、数多ある例文から結果補語について一般的な傾向を歸納しているわけでもない。

以上から『文典』と『割記』において結果補語構文、ひいては動詞連續構文は特段の注意を引いていないと結論づけられよう。時制表示との関係において「V完」「V成」が取り上げられる程度である。

## 1.2. マーシュマンとモリソン

19世紀初頭にモリソンが來華してプロテスタント傳道が幕を開ける。カトリック宣教師同様、彼らも中國語を研究して文法書を著すことがあった。モリソンは中國傳道の任務の一環としてロンドン傳道會本部から中國語の習得が課せられていたため、1809年に來華して6年後には早くも『*Grammar of the Chinese Language* 通用漢言之法』(1815。以下『通用』)なる文法書を著している。一方、ほぼ同時期にインドで傳道に従事していたマーシュマンも『*Elements of Chinese Grammar* 中國言法』(1814。以下『言法』)を著した<sup>7)</sup>。

まず、時期的にわずかに先行する『言法』から検討したい。『言法』は主に文言文を分析対象としているが、時折口語文法にも言及がある。マーシュマン

は結果構文の一部、つまり「V完」を完了形の一つとみなしている。

(4) *The Perfect Tense.* — The Chinese express an action as finished or *perfected*, either by prefixing, or postfixing certain characters to the verb. Those generally *prefixed* are 已 *éé*, 'done; [sic] 既 *keè*, 'done; [sic] 嘗 *shyang* [sic] 'taste, try; and 曾 *ts'hung*, 'add or increase.' Those *postfixed* are 了 *lyáo*, 'manifest; 完 *hwan* [sic], 'complete; and 過 *kwò*, 'exceed.'<sup>8)</sup>

[完了時制。中國語は完成したり、“完了した”りしたものとしての動作を、動詞の前或いは後ろに特定の字を付けることで表現する。一般的に前に来るものには「已」「なされた」、「既」「なされた」、「嘗」「味わう、試す」、「曾」「加える、増える」がある。後置されるものには「了」「明白な」、「完」「完成する」、「過」「越える」がある]

マーシュマンによれば7種もの語が完了形を形成することになるが、(4)の記述の後に個々の字について説明が與えられる。そして「完」について取り上げた箇所では以下のように記述する。

(5) The character 完 *hwan* [sic], 'to finish, to complete', is likewise often added in conversation to a verb, to denote the preterite; but in this sense it is not found in Confucius or Mung, nor in scarcely any respectable work. In conversation it occurs in sentences like the following;

"Have you read that book or not?"

你 念 完 那 本 書 否  
Néé nyén hwan nà pún shoo féu

Have you reading completed that (encl.) book or not? <sup>9)</sup>

「完」「終える、完成させる」という字も同様に、會話においてしばしば動詞に加えられ、過去時を表す。しかし、この意味での「完」は孔子や孟子の著作には見えず、また他の立派な著作にもほとんど見られない。會話においては以下の「あなたはその本を読み終えたか?」のような文で「完」が見られる]

ついで『通用』について検討したい。文言文中心の『言法』に對し『通用』は主に口語を對象としている。モリソンは英文法の枠組みに忠實に従って動詞を解説するため、現代の結果補語構文に相當する表現の一部が英語における分詞のマーカ―として挙げられる。例えば、That work is done. の過去分詞 done に對して「那件工夫做完」の「做完」が相當するという解釋である。そして「做完」のバリエーションとして「做完了」「做明白」「做明白了」「做畢」「做清楚」「做了」「做清楚了」の7種を挙げる<sup>10)</sup>。同様の解説は動詞 advise についても與えられており、その過去分詞 advised に對して「勸了」「勸過」「勸完」「勸畢」「勸明白了」という5種のバリエーションが挙げられている<sup>11)</sup>。現代でいうところの結果補語が「完」「明白」「畢」「清楚」と4種見られるが、いずれも過去分詞のマーカ―とされる。

實は『通用』中の例文では結果補語構文が使われているものもあるが、特段の注記は見られない。例えば “If he had worked diligently in the morning, he *could have been done* by 12 o'clock.” (彼が朝まじめに働いていたならば、12時までには終えることができただろうに) とモリソンが譯す「若他今早勤做工夫到午時他可能辦明白了」という例文では「辦明白了」なる形が見いだされるが、四字まとめて finished というグロスのみがあって、「辦明白」がモリソンの注意を特に引いた形跡はない<sup>12)</sup>。

モリソンにせよマーシュマンにせよ、英文法に忠實な記述を行ったために結果補語を分詞や時制のマーカ―と捉えることになったといえるだろう。自らの母語の文法體系に大きく基づく點は『文典』と同様である。

### 1.3. レミュザ

レミュザは中國を訪れたことはないものの、パリにあつて獨學で中國語に長じ、27歳にしてコレージュ・ド・フランスの中國學講座の初代教授となった。本稿ではレミュザの主著の一つ『*Éléments de la grammaire chinoise* 漢文啓蒙』(1822。以下『啓蒙』と略稱)という文法書を取り上げる。

レミュザは『啓蒙』において結果構文の理解について現代に受け繼がれる重要な觀察を二つ残している。第一に、ある動詞と別の動詞が組み合わさって新たな意味を獲得する、という記述である。まずレミュザは以下のように述べる。

(6) Il y a des verbes qui, joints à d'autres verbes, forment des expressions dont le sens s'éloigne plus ou moins de celui des mots qui les constituent: ce sont des verbes auxiliaires, non pour la conjugaison, mais pour le sens.<sup>13)</sup>

[他の動詞に付くような一群の動詞があって、その動詞たち全體である意味を表す。複合語全體の意味は、それを構成する各々の語の意味とはいくらも異なる。この一群の動詞は補助動詞であるが、動詞の活用のためではなく意味のために用いられる]

そしてここで挙げられる *verbes auxiliaires*（補助動詞）には「將」「着/著」「得/的」「去」「來」がある。なかでも「着」についての解説は注目すべきだろう。

(7) 着 *tchô*, placé après les verbes, donne plus de force à leur signification, en marquant que l'action qu'ils expriment a lieu effectivement, ou atteint le but que le sujet s'est proposé.<sup>14)</sup>

[[着]は動詞の後ろに置かれ、その意味を強める。それらが表現する動作が実際に行われること、あるいは主語が行うつもりの目的を果たしたことを示すのである]

レミュザは「尋訪着了」*Je l'ai trouvé* [私は彼を見つけた] という例文を挙げて、“*Thsin-fang liao* signifieroit seulement *je l'ai cherché*.” [「尋訪了」は“私は彼を捜した”ということだけを意味してしまう] という注意を與える<sup>15)</sup>。このことはレミュザが結果補語としての「着」の文法機能を正確に理解していたことを示すものである。一方で、ウェアロ以降の文法書でみな過去時制あるいは過去分詞のマーカーと解されていた「完」や、モリソンとマーシュマンが記述した「畢」「清楚」「明白」などについてレミュザは取り上げていない。

レミュザのいう補助動詞を構成する他の成分についての例はそれぞれ「將那女子救了出來 *Il délivra cette femme et la fit sortir* [彼はその女を救い出し、彼女を逃した]」(p. 131)、「曉得 *Je sais, je suis au fait, cela suffit* [分かった/よく知っている/十分だ]」(p. 133)、「拿去 *emporte* [持っていけ]」(p. 134)、「拿來 *apporte* [持ってこい]」(p. 134) である。現代の基準で言えば結果補語構文に加えて方

向補語構文や把構文も同じカテゴリーにまとめられていることがわかる。

もう一つのレミュザの功績は、動詞が連続する構文について管見の限り初めて節を設けて言及したことである。レミュザがこの構文に注目していたことを物語る事実というべきであろう。レミュザは「二つ又はそれ以上の動詞が活用なしに続く」構造について以下のように述べる。

(8) Indépendamment de la réunion des verbes synonymes ou presque synonymes, et des verbes auxiliaires, il n'est pas rare de trouver deux ou plusieurs verbes de suite sans conjonction. Ces verbes alors appartiennent à des sujets différents: le premier ou les premiers doivent être pris au sens transitif, et leur complément, sujet de celui ou de ceux qui suivent, peut être, suivant les cas, exprimé ou sous-entendu:

[同義語あるいは近義語が結合したり、補助動詞が結合したりするのは別に、2つ又はそれ以上の動詞が活用なしに続くということが頻繁に観察される。これらの動詞は異なった主語を持つ。最初の一つ或いは最初のグループは他動詞の意味をもつものとして捉えねばならず、後続する動詞の補語<sup>16)</sup>や主語は、おそらくは状況次第で、明示されるか文脈から補われるかが決まる]<sup>17)</sup>

レミュザのこの記述の直後に続く例文は「來回報西門慶知道」、「留在身邊」、「潑在地下」の3例である。おそらくレミュザが念頭に置いていた構文はいわゆる兼語文と「V在」「V給」のごときものであろう。同時に、(8)のカテゴリーに属する形式では動詞の前項と後項で主語が異なるという観察も重要である。上述の例文について言えば「回報」と「知道」の動作主、「留」と「在」、「潑」と「在」の動作主はそれぞれ明らかに異なる。残念ながらこれ以上の分析は書かれていないが、注意すべきことは、彼は(8)に属する動詞を「同義語あるいは近義語が結合したり、補助動詞が結合したりするのは別」であるとみなしていることであろう。「同義語あるいは近義語が結合」する例としては「說道 dire [言う]」(p.130)や「看見 voir [見る]<sup>18)</sup>」(p.130)、「補助動詞が結合」する例としては「晓得」や「拿來」が挙げられている。「補助動詞の結合」に



において補助動詞の説明は(6)に見るようにそこまで洗練されておらず、「複合語全體の意味が、それを構成する各々の語の意味とはいくらか異なる」ものと定義される。従って例えばレミュザの擧げる「拿來」がこの定義に當てはまるか疑問なしとはしない。ただ「看見」「說道」「曉得」「拿來」のいずれも複合動詞の前項と後項が同じ動作主を持つことは確かである。

以上からレミュザは動詞を分析する基礎として以下のような分類を行っていたと考えられる。まず動詞は一字かそれ以上かで分類される。一字ならばレミュザが中國語の基本的性格と見なした *monosyllabe* (單音節語)、それ以外ならば *verbe composé* (複合動詞) である。次いで二字以上の場合、各項の動作主が同じかどうかで下位分類される。各項の動作主が同じであれば、同義語の結合かどうかによってさらなる下位分類を施す。同義語の結合であれば *deux verbes synonymes ou presque synonymes* (同義動詞)、そうでなければ *verbes auxiliaires* (補助動詞) である。これに對し、動作主が複合語を構成する各項で異なるのであれば「2つ又はそれ以上の動詞が活用なしに續く」タイプとなる。

また動詞連續構文に關することとは別の貢獻として『啓蒙』においては『割記』と同様の試みがなされていることにも注目したい。つまりヨーロッパ諸語の文法に過度に合わせない記述法の試みである。これは『割記』を発見したレミュザが大きく影響を受けた點だと思われる<sup>19)</sup>。『割記』はラテン語やフランス語文法の枠内での記述をほぼ放棄し、プレマールが重要と判断した字や句を含んだ例文を大量に擧げることにより、その用法を讀者に經驗的に理解させる方針を採っていた。『啓蒙』はそこまで極端ではないものの、動詞に關して例えば時制や法中心の記述ではなく音節數、動詞各項の動作主、意味といった基準による分類と記述が試みられていることに特徴がある。それまで動詞記述の中心を成していた時制についていえば、『啓蒙』では動詞が先述の基準で分類された後、時制表示の機能を持つとされる個々の語の下で説明がなされている。これはウェアロやマーシュマン、モリソンとは明らかに異なるアプローチである。

以上のようなレミュザによる創見と試みを経て、エドキンスは結果補語構文の一般的な記述におおよそ成功するのである。次節ではエドキンスが果たした役割を検討したい。

## 2. エドキンス

### 2. 1. *A Grammar of the Chinese Colloquial Language* (1857)

エドキンスの著作は中國語文法書、教科書、辭書など複數あるが、このうち *A Grammar of the Chinese Colloquial Language* (1857, 以下『官話文法』) は彼の代表作であり、19世紀中期の研究全體を代表する文法書であるといつてよい。

まずはエドキンスが動詞をどのように捉えているかをみたい。エドキンスはプレマールに始まりレミュザが受け繼いだ、中國語をヨーロッパ諸語の文法體系に合わせすぎない記述態度を繼承する。その結果、『官話文法』は6種の基準による動詞分類を提示することとなった。すなわち (i) Formation of compounds (複合語の形態)、(ii) Affirmative and negative groups (肯定形と否定形)、(iii) Groups formed by repetition and antithesis (疊語と反義語)、(iv) Different kinds of verbs (各種の動詞)、(v) Modes of verbs (動詞の法)、(vi) Particle of time forming tense of verbs (動詞の時制を形成する、時を表す小詞) という基準である。モリソンやマーシュマンの文法書では中心的な存在だった時制の記述は、時制を表すとエドキンスが認めた成分をみな particle (小詞) としてまとめ、動詞のパートの最後 (vi) で一括して扱うという處理がなされた。結果補語構文が集中的に挙げられていることから、本稿では字數を基準とした分類 (i) に焦點を當てる。

さて (i) では一字動詞は simple (單純動詞) としてまとめられ、二字以上が compound (複合動詞) とみなされる。後者の複合動詞は co-ordinates (同格動詞) と auxiliary words (補助動詞) に分けられる。前者の同格動詞がレミュザのいう「同義語あるいは近義語が結合」する動詞群をおおよそ包含し<sup>20)</sup>、後者の補助動詞がレミュザの引用 (6) にある補助動詞におおむね該当する。エドキンスは、レミュザがそれ以上の細分化を施さなかった補助動詞についてさらなる分析を加えた。その結果を示すと以下 (9) の通り。(9) における番號は千葉が假に振ったものであり、番號が2から始まっているのは、1は補助動詞に先行する同格動詞のセクションで使われるべきだからである。

(9)

2. auxiliary words (補助動詞)

2. 1. groups of two (二字動詞)

2. 1. 1. limit the verb to a single act of perception (知覺しただけの状態に動詞を限定するもの)

2. 1. 2. give direction to the action of the verb (動詞の動作に方向を與えるもの)

2. 1. 3. describe the beginning, cessation and completion of an action (動作の開始、中斷、完成を描寫するもの)

2. 1. 4. expressive of restraining, resisting, and destruction (制限、抵抗、破壊を表すもの)

2. 1. 5. expressive of excess and superiority (過剰と優越を表すもの)

2. 1. 6. decisiveness of an action (動作の確定を表すもの)

2. 1. 7. substantives combined with verbs in groups of two or three words (二字語・三字語において動詞と組み合わせる實名詞)

2. 1. 8. many adjectives follow verbs to limit the extent of their action (動詞に後續してその動作の程度を限定する形容詞)

2. 2. groups three and four (三字/四字動詞)

2. 2. 1. an auxiliary of two characters with the principal verb (主動詞に付く二字の補助動詞)

2. 2. 2. reflexive action (再歸動詞)

ここから見られるとおり、エドキンスはまず補助動詞という概念をレミュザから受け継ぎ發展させた。本稿で同じ譯語を用いたところの、レミュザの用語 *verbes auxiliaires* およびエドキンスの *auxiliary words* を比較すれば影響關係は明らかである。また、ある種の動詞連續を構成する動詞の動作主がそれぞれ異なるというレミュザの洞察についても發展的に繼承した。以上を総合した成果は、補助動詞を定義した以下の一文に端的に表れている。

(10) Auxiliary words are such as losing their own independent character and governing power, are applied to limit other words in their action or signification. When two verbs stand together, one being the principal word (and usually transitive), and the other auxiliary (and intransitive), the former precedes.<sup>21)</sup>

[補助動詞は獨自の特徴および目的語を支配する力を失って、動作あるいは意味の點で他の語を限定するために使われるものである。二つの動詞が並列する時、一つは主要な語（かつ普通は他動詞）であり、もう一つは補助語（かつ自動詞）である。前者が先行する]

補助動詞において後項が動詞である場合、エドキンスは(9)の分類によって2.1.1. から2.1.6の6種に分けた説明を試みる。ここで扱われる成分はのべ41種に及び、認定された補助動詞の数がレミュザよりも大幅に増加していることが分かる<sup>22)</sup>。すなわち2.1.1. 「得」「的」「見」「着」、2.1.2. 「上」「過」「下」「進」「出」「轉」「前」「後」<sup>23)</sup>、2.1.3. 「起」「停」「罷」「完」「煞」「殺」「畢」「盡」「成」「到」「攏」「開」「散」、2.1.4. 「住」「掉」「去」「死」「殺」「壞」「滅」<sup>24)</sup>、2.1.5. 「過」「死」「贏」「輸」「勝」「敗」、2.1.6. 「定」「殺」「死」である。以上を要するに、2.1.2の多くが現代の區分で言えば方向補語に当たる他は、おおむね現代の結果補語構文に相當する成分が集められていることが分かる。エドキンスの分類の正確さを確認できよう。

ここからは『官話文法』の結果構文について細部を見たい。まず同格動詞と補助動詞をいかに區別すべきかについて、エドキンスは優れた判定法を指南している。

(11) The best test for judging if a verb following another is co-ordinate or auxiliary, is to observe if it will bear the insertion before it of teh 得 or puh 不. If not it should be considered as co-ordinate.<sup>25)</sup>

[ある動詞に後續する動詞が同格動詞か補助動詞かを判定する最良の方法は、「得」あるいは「不」を挿入できるかどうかを観察することである。もし挿入できなければ同格動詞と見なすべきである]

つまり現代の用法で言えば可能補語を形成できるかどうかで、同格動詞か補助動詞かが判定できるというわけである。紙幅の関係で詳細な言及はできないものの、エドキンスの動詞分類 (ii) においては、彼のいう補助動詞の肯定形・否定形が大量に挙げられている。

本稿でエドキンスの記述をレミュザに比べて發展的と形容する理由の一つは、結果補語構文の分類の細分化に加え、動詞に動詞が後續する例に留まらず、動詞に形容詞が後續した形についても記述があることによる。それは (9) の分類における 2. 1. 8 に指摘される。

(12) Many adjectives follow verbs to limit the extent of their action, just as is done by the auxiliary verbs already exemplified. 被人看破 *pei'jen k'an' p'o', he was looked contemptuously on by others*; 走近 *'tseu kin' (ch)*, to walk near. [...] One adjective 好 *'hau* is used after any verb, in the sense of completion, as 寫好呢 *'sie 'hau .ni, have you finished writing it?*<sup>26)</sup>

[多くの形容詞が動詞に後續して、ちょうどすでに例示した補助動詞のように、その動作の程度を限定する。「被人看破」「彼は他人から見下されているように見えた」、「走近」「そばまで歩く」…[中略]… 形容詞「好」は完成の意味をもってあらゆる動詞の後に付く。「寫好呢」「あなたはそれを書き終えたか？」のように]

この記述が形容詞の項目ではなく動詞、しかも補助動詞の項目にあることから、エドキンスは形容詞が補語となるような結果補語構文も、動詞が後續する構文と同等に扱おうとしたように見える。つまり後項の品詞に関わりなく結果補語構文を統一的に捉えようとしていた證左とみなせるであろう。このことは本稿で「補助動詞」と譯している用語が *auxiliary verbs* ではなく *auxiliary words* である点からも察することができるように思われる。

以上を通して見ると、結果補語という命名こそされていないものの、動詞分類を経て (9) における補助動詞の下位分類、(10) に見える補助動詞の定義、(11) における同格動詞との區別法、さらには (12) において形容詞が後續する形式を指摘することによって、エドキンスは結果補語構文に相當する現象をか

なり一般的な形で記述することに成功したといつてよいだろう。

しかし、實はエドキンスのこうした創見は官話の研究によって初めて提出されたものではなかった。これに先立つ彼の著作にはすでにほぼ同様の考察が見えるのである。したがって次節では『官話文法』に先立つこと4年前の文法書の記述を検討したい。

## 2. 2. *A Grammar of Colloquial Chinese* (1853)

### 2. 2. 1. 結果補語の分析

エドキンスの中國語に關する單著で最も早いものは上述の『官話文法』ではなく、*A Grammar of Colloquial Chinese as Exhibited in the Shanghai Dialect* (1853。以下『上海語文法』と略稱)であった。エドキンスは25歳で來華してからの10年あまりを上海で過ごしているが、『上海語文法』は來華わずか5年目、30歳の時の著作である。エドキンス本人も序文で述べるように、これは最初期に屬する本格的な中國語方言學の專著であつた<sup>27)</sup>。

『上海語文法』は第二部文法編の第七節を動詞の考察に當てている。まずエドキンスは、動詞を四つの側面から分類する。即ち (a) grouping of verbs (動詞の結合)、(b) different kinds of verbs (各種の動詞)、(c) modes of verbs (動詞のモード)、(d) particles of time (時を表す小詞)である。Edkins (1853: 123)によればそれぞれ動詞の字數、態、法、時による分類に對應する。この分類法が四年後の『官話文法』に引き繼がれていることは明白であろう。このうち本稿の關心から (a) を取り上げれば、動詞は一字から成る simple verbs (單純動詞)と二字以上から成る compound verbs (複合動詞)に分類される。複合動詞はさらに10種類に分けられるが、そのうちの第5種が結果補語を含むカテゴリーとなる。なお上海方言には當時の官話や現代の普通話と同様、補語を用いた構文が存在する。

(13) In verbs of two syllables, many auxiliary words occur, which have nearly or quite lost their primary meaning as independent verbs. In the following examples, it will be observed, that these enclitics or proclitics, as they may be termed, often add nothing to the meaning of the principal verb. They are 得 tuh., 脫 t'eh, 打 'táng, 見 kien', 着 záh, 住 dzú'.<sup>28)</sup>

[二音節動詞においては多くの補助語が現れる。それは獨立した動詞である時に持っていた本來の意味をほとんど、あるいはかなり失ってしまっている。こうした前接語や後接語はその名の通りしばしば主動詞の意味に何も付け足さないということを以下の例で了解できるだろう。その補助語とは「得」「脱」「打」「見」「着」「住」である]。

いまここに挙げられた6種の成分を持つ語形の具體例を見れば以下の通り。

(14)

聽得 t'ing tuh, *hear* “聞く”; 曉得 'hiau tuh, *know* “知る”。

去脱 k'í t'eh, *remove* “取り除く”; 走脱 'tseu t'eh, *escape* “逃げる”。

打掃 'táng sau, *to sweep* “掃除する”; 打聽 'táng t'ing, *to inquire* “尋ねる”。

看見 k'ön' kien', *see* “見かける”; 聽見 t'ing kien', *to hear* “聞こえる”。

捉着 tsoh záh, *catch* “捉える”, or *succeed in catching* “捉えることに成功する”。

阻住 tsú dzú', *resist* “抵抗する”; 揪住 t'sieu dzú', *hold with the hand* “手で押さえる”<sup>29)</sup>。

『上海語文法』でいうところの「補助語」には主動詞に前接するものと後接するものがあるので「打」が含まれていることは驚くに値しない。四年後の『官話文法』では補助動詞から前接語はすべて除かれ、「打」を含む複合語は同格動詞のカテゴリーに移されている。いま「打」を除いて後置詞に注目する限り、エドキンスは『上海語文法』において、後世稱されるところの結果補語構文を構成する代表的な成分をおおよそ正確に指摘したといつてよいだろう<sup>30)</sup>。この説明にはまだ後項の動詞や形容詞が前項の動詞の意味を限定するという、項同士の関係を記述する段階には至っておらず、後項成分が本來の意味から變化することを指摘するにとどまる。

さらに注意すべき點は、『上海語文法』の同じ項目において、すでに動詞に形容詞が後續するタイプの構造が指摘されている點である。

(15) Compound verbs are formed by the apposition of a transitive verb and adjective.

加長 *ká* (*add*) *dzáng* (*long*), *to lengthen*

親近 *t'sing* (*to make near*) *'giun*, (*near*), *become near, to approach closely*

掘深 *kiöh*, (*dig*) *sun* (*deep*), *to deepen*

減輕 *'kan* (*subtract*) *k'iung* (*light*), *subtract from*.<sup>31)</sup>

〔複合動詞は他動詞と形容詞を並列することで作られる。

「加長」*ká* (加える) *dzáng* (長い), “長くする”

「親近」*t'sing* (近づける) *'giun*, (近い), “近くなる、側まで近づく”

「掘深」*kiöh*, (掘る) *sun* (深い), “深くする”

「減輕」*'kan* (減らす) *k'iung* (軽い), “～から差し引く”〕

ただし他動詞＋形容詞の形式は『上海語文法』における複合動詞の下位分類10種の第7種に挙げられており、第5種の補助動詞からは獨立した記述になっている。したがって『官話文法』で見たように補助動詞という同じ枠内で統一的に記述されているというわけではない。

以上から、『官話文法』に見られるようなエドキンスの中國語動詞への理解および結果補語構文についての分析は、基本的にはすでに『上海語文法』に見られることが明らかである。

## 2. 2. 2. 動詞分類

『上海語文法』の結果補語構文分析の前提となる動詞の分類、ひいては語の分類がドイツ人宣教師ギュッツラフ (Carl Friedrich August Gützlaff) およびフランスの漢學家バザン (Antoine Pierre Louis Bazin) に由來することは、大きな注目に値するように思われる。『上海語文法』の序文では先行研究に觸れるが、プレマールに比較的高い評價を與える一方でエドキンスの一世代上に当たるモリソンやマーシュマン、レミュザの研究には總じて批判的である。代わりに、レミュザの後輩に当たるバザンの *Mémoire sur les principes généraux du chinois vulgaire* (1845, 『中國語口語の一般原理に關する覺書』。以下『覺書』と略稱) を、特に複合語の分析という點において評價する。また、そのバザンは自らの分類法がギュッ



ツラフの *Notices on Chinese Grammar* (1842, 以下 *Notices* と略稱) の影響を受けているといい、それは兩書を見れば事實であることが分かる<sup>32)</sup>。

前述したとおり、エドキンスの結果補語構文に関する分析は『啓蒙』を基礎として引き継いだものが多いと考えられるが、エドキンスがレミュザに對して不満だったのは語の分類基準が不明確であった點である<sup>33)</sup>。エドキンスは『上海語文法』において語、特に二字以上の複合語に格別の注意を拂っていた。“Attention has been paid throughout to the mode of grouping words, as a subject second to none in interest and importance. [複合語の形態全體にわたって注意を拂った。興味深さおよび重要性においてそれ以上のものはないからである]”<sup>34)</sup> という言明は、ギュッツラフおよびバザンから受けた啓發が小さくないことを物語るであろう。従って彼らの語の分類を検討する必要が生じる。

まずギュッツラフの記述から検討すると、*Notices* は第三章を On Words (語について) と題し、中國語における語の問題を検討する。そこでは二字語を 4 種に分類する。すなわち (イ) 二つの字が共に同義語である語 (例: 「衣服」“服”)、(ロ) 片方が一般的な意味を表し、もう片方が限定的な意味を與える語 (例: 「祭道」“無駄な繰り返し”。「道」“言う” が一般的な意味を表し、「祭」“反復する” が意味を限定する)、(ハ) それぞれの字に關連がありつつも新しい意味をなす語 (例: 「絆絡」“わな”。「絆」“絡まる寸前の繩” と「絡」“生絲”)、(ニ) 二つの字を並列することによって元の字にない新しい意味を生じたもの (例: 「先生」“教師”。「先」“先の” と「生」“生まれる”)<sup>35)</sup>。このうち (ニ) 類の解説においてギュッツラフは以下のごとく中國語に複合語の概念を導入するのである。

(16) The fourth class, certainly the most difficult, is not remarkable for its richness in primary ideas, but for its utility in describing scientific objects, or words that have been introduced by progressive civilization: such as [...] 外科 wae ko, surgery. The student should not separate these expressions, but consider them as compounds; just as he would polysyllabic[sic] words in any language, and thus read waeko, and not wae ko, no more than he would pronounce, or write sur gery, or trans actions.<sup>36)</sup>

[第四類 [= (ニ) 類] は疑いなく最も難しいものだが、各々の字の意味の

豊富さという点ではなく、科學的なものや、進歩の最中にある文明がもたらす新語を表すのに使えるという点で注目すべきだ。つまり…[中略]…「外科」「外科」のような語である。學習者はこの語を分割すべきではなく、複合語として捉えるべきである。他の言語の多音節語のように、[「外科」は] waeko と一氣に發音すべきであり、wae ko と分けて發音すべきではない。英語の surgery や transactions を誰も sur gery や trans actions と分けて發音したり書いたりしないのと同様である]

中國語を單音節語のみから成る言語とはせずに多音節語の存在を認め、その内部構造を分析するというギュッツラフのアプローチは、バザンを経由してエドキンスの取り入れるところとなったであろう。

次いでギュッツラフを参照したバザンの分析を見よう。彼の複合語分類は二字語から五字語までを含み全15種に達する。このうち動詞が關わる二字語は第10種と第11種、すなわち (α) De deux monosyllabes exprimés par deux caractères, dont le premier est un verbe auxiliaire, et le seconde un verbe actif, neutre, etc. [二つの字で表される二つの單音節語から成り、一語目は補助動詞、二語目は能動、中立などといった動詞であるもの] と (β) De deux monosyllabes exprimés par deux caractères, dont le premier est un verbe, et le seconde un substantif, complément du verbe; [二つの字で表される二つの單音節語から成り、一語目は動詞、二語目は實名詞や動詞の目的語であるもの] の二種である<sup>37)</sup>。(α) 類に關していえば、バザンはレミュザの『啓蒙』から (8) を引用した後で「打點」「打聽」などを擧げる。バザンによれば、前項「打」が補助動詞であり、後項「點」「聽」が主動詞と解釋されるようだ。(β) 類に關しては「讀書」「寫字」「吃飯」などが例示される。しかし、第1種から9種までが名詞・形容詞・數詞・量詞などの分類であることを考慮しても、動詞の分類が貧弱であることは否めない。

以上見たようなギュッツラフとバザンの分類を踏まえてエドキンスは獨自の動詞分類を施し、動詞記述を行つたと考えられる。『上海語文法』の (13) において補助動詞が本來の意味を失っていることを指摘しただけであつたのに始まり、四年の間を経た『官話文法』において (10) や (12) のごとく後項が前項の意味を限定するという理解に達する過程は興味深いものがある。例えばエドキ

ンスのいう「限定 (limit)」という發想にギュッツラフ *Notices* (ロ) 類の記述を見ることはそう困難ではないだろう。

#### 4. 結語

本稿では19世紀西洋資料にみえる動詞連續、中でも結果補語構文についての記述を追うことで中國語文法學史の一端を明らかにしようとした。結果補語構文について、18世紀のウェアロ、19世紀初頭のモリソンやマーシュマンの文法書には「V完」を中心にその簡単な記述が見られる。彼らはそれを時制あるいは過去分詞を表すマーカーと解釋した。プレマールは同様に「V完」を過去のマーカーと見なしつつも、ヨーロッパ諸語の文法體系に中國語を當てはめることをほぼ放棄している點が異なる。いずれにせよ、上述の諸文獻は動詞連續構文に對して特段の注意を拂ってはいない。

レミュザは19世紀前半のフランスにあって動詞が連續する形式に初めて節を設けて言及した。また複合動詞を3種に區分する創見は、エドキンス本人は影響を明言しないものの『上海語文法』や『官話文法』編纂の参照點となったと思われる。またプレマールに始まり彼の『劄記』を發見したレミュザに到る、ヨーロッパ諸語の文法體系にこだわりすぎない記述態度はエドキンスに受け繼がれその文法記述の基礎を成した。

以上をふまえてエドキンスは(10)の記述により、結果補語構文を含む形式の基本的な定義を下すことに成功したといえるだろう。加えて、動詞だけではなく形容詞が後續する結果補語構文についても言及し、これらを同一の節にて扱うことで、より統一的な結果補語構文の把握に向けて大きな一歩を進めたのである。

しかしながら、この理解の基礎が官話の研究からではなく方言、具體的には上海方言の研究から生まれたことは興味深い事實である。エドキンスが來華わずか5年目にして著した『上海語文法』には、4年後の『官話文法』に見える基本的な知見がほぼ披露されていた。

加えて、結果補語構文への注目と中國語における語 (word) の分類とがエドキンスにあっては緊密に連携していたことも見逃してはならない。中國語のすべての語が單音節的であると認識されている間は、動詞が連續する形式の分析は

不可能であった。これに對しギュッツラフの「いくつかの語は多音節語とみなさねばならない」という斷言と、それに影響されたバザンの複合語分析が、エドキンスの上海語研究に受け繼がれ、最終的には『官話文法』における精緻な動詞分類へとつながっていくのである。特に、これまであまり顧みられることのなかったバザンやギュッツラフといった人物の中國語研究がエドキンスの成果の基礎をなしていたことは強調に値する。バザンは『覺書』において先輩レミュザを批判する中で、字と語の峻別、中國語＝單音節語説からの脱却を強く訴えていた。一方、ギュッツラフはこれまで獨特徴な宣教活動や翻譯活動ばかりが注目され *Notices* を含めた中國語への言及は見過ごされてきたが、その中國語研究家としての側面にも光を當てるべきであることが示されたといつてよい<sup>38)</sup>。

最後に、今後の検討課題を以下の四點にまとめて本稿の結びとしたい。

(I) エドキンス以外の西洋人による方言研究が『上海語文法』に影響を及ぼしたか否か。

(II) エドキンスによる結果補語の把握がいかに後代の中國人研究者に受け繼がれたのか。

(III) エドキンスを初めとする西洋人研究者によって結果補語構文以外の統語現象がいかに把握されてきたのか。

(IV) バザンやギュッツラフのように、これまで注目を集めることの少なかった西洋人による中國語研究の再評價。

[付記：本稿は中央大學共同研究費「漢語諸方言の動詞連續構文研究－結果構文を中心に－」（代表：石村廣）および平成28年度科學研究費補助金（基盤C）「歐文資料 *Notitia Linguae Sinicae* による清代中國語研究」（代表：千葉謙悟）による研究成果の一部である]

## 注

- 1) 最近の研究成果には石村 (2011)、丸尾 (2014) を参照。
- 2) 「結果補語」の名稱は管見の限り中國科學院語言研究所語法小組 (1952: 23) に見えるものが初期に屬する例と考えられることから、比較的新しい術語であることが分かる。
- 3) Edkins (1888: 69-70). なお、引用文の日本語譯においては原文のローマ字標音を

原則として省略する。以下同。

- 4) ウェロおよび『官話文典』については特に古屋（1996）を参照。影印・英譯本についてはCoblin & Levi（2000）がある。本稿でも『文典』の影印と英譯についてはこれを参照した。プレマールおよび『割記』については千葉（2005a）に始まる一連の和譯を参照。『割記』原本については1831年版の影印である何（2002）が簡便である。
- 5) この例文と次の例文はともにCoblin & Levi（2000：118-119）による。紙幅の関係でローマ字標音は省略。例文中のローマ字から同定した漢字も同書同頁による。
- 6) 千葉（2005a：122）。
- 7) モリソンとマーシュマンの個人的関係については朱（2013）、『通用』および『言法』の文法記述の対照については内藤（1995）、『言法』自體については内藤（1998）参照。
- 8) Marshman（1814：435）。
- 9) Marshman（1814：439-440）。『言法』の例文は漢字を用い、縦書きである。行は右から左に進む。各字の右側には二種の注記があり、それらは二段に分かれる。上の段には発音のローマナイズが記され、下の段ではグロスが與えられる。本稿では横書きにする都合上、上から漢字、ローマナイズ、グロスの順に記した。なお、グロス中の encl. とは enclitic のことで、附加語の意である。マーシュマンは現代でいうところの量詞をこの語で示す。
- 10) Morrison（1815：172-73）。
- 11) Morrison（1815：190）。
- 12) Morrison（1815：164）。なお『通用』の例文表示法は『言法』に同じい。注（9）参照。
- 13) Rémusat（1822：131）。
- 14) Rémusat（1822：132）。
- 15) Rémusat（1822：133）。なおプレマールにも同じ例文が見える。「「尋訪着了」 sin fàng tcho[sic]leà “私はついに彼を見つけた”」（千葉 2008：188）。實は『啓蒙』に見える例文の多くは『割記』から孫引きされている。千葉（2013）参照。
- 16) ここでいう補語（complément）はフランス語學の用語で目的補語のこと。英語學でいうところの目的語を指す。
- 17) Rémusat（1822：140）。
- 18) レミュザは「見」を「みる」と解釋しているため、「看見」を「說道」などと同じ語構成と見なしているのである。Rémusat（1822：130）参照。
- 19) プレマールの『割記』の草稿は中國からバリに送られたが出版されることなく100年以上バリ國立圖書館に放置されていた。それをレミュザが発見し紹介したのである。その後モリソンがマラッカに設立した英華書院（Anglo-Chinese College）から1831年に排印本が出版され、1847年には英譯本が出て廣く世に知られるようになった。

た。ゆえにプレマールが中國語研究に與えた影響はその執筆當時ではなくむしろ19世紀において大きい。

- 20) エドキンスの「同格動詞」は「觀看」「違逆」のような同義語の結合だけではなく「動靜」のような反義語の組み合わせ、さらに動詞を目的語に取る他動詞とエドキンスが理解した形式（「領教」「討厭」など）をも含む。
- 21) Edkins (1857 : 165).
- 22) いくつかの成分は複数回出現する。例えば「過」は2. 1. 2. と2. 1. 5. に2度現れるが、一つめは「過 [よぎる、過ぎ去る]」と解釋されるもので「走過 [歩き去る]」、「飛過 [飛び去る]」を例とし、二つめは「過 [よぎる、越える]」と解釋されて「水漲過 [水位が上がりすぎた]」、「太陽曬過 [日にさらしすぎてしまった]」を例とする。Edkins (1857 : 166, 168).
- 23) 方向補語の代表格というべき「來」「去」について、ここでは言及がない。エドキンスによれば「來」「去」は補助動詞ではなく同格動詞であった。同格動詞の節を見ると、「來」「去」が取り上げられ、「走來」「拿去」という方向補語としての典型的な用例が挙げられている。Edkins (1857 : 164-168).
- 24) エドキンスはこの類の一部について、同格動詞と補助動詞のどちらに入れるべきか意味の面から悩んでいるが、以下の引用 (11) に述べるテストをパスすることから統語上のふるまいを優先して補助動詞に入れている。Edkins (1857 : 168).
- 25) Edkins (1857 : 165). なおエドキンスはこの判定法の例外に「曉得」を挙げる。つまり「曉得」は間に「得」も「不」も挿入できないが補助動詞であると解する。
- 26) Edkins (1857 : 169). 『官話文法』における聲調表示は字の四隅に付した点による。すなわち「□」を一音節分のローマ字標音とすれば「, □」が陰平、「. □」が陽平、「' □」が上聲、「□'」が去聲を示す。入聲はローマ字標音の最後がhで終わることによって示される。このh自体は入聲を表す以外の意味はない。
- 27) Edkins (1853 : iv).
- 28) Edkins (1853 : 125). ここでは6種を挙げるが、以下それぞれの語の解説では(13)に記載のない「殺」にも觸れているので、実際には全部で7項目が扱われていることになる。また、『上海語文法』のローマ字標音における聲調表示法は『官話文法』に同じい。注 (26) 参照。
- 29) Edkins (1853 : 126-127).
- 30) いわゆる方向補語を含む形式は第3類に分類される。これは「一字目が二字目を修飾するタイプの二音節動詞」とされ、「跑來」を例にすればこの語釋はcome runningであり、エドキンスによれば英語に基づいて「跑 (running)」が「來 (come)」を修飾する。従って「跑來」は「抄寫」といった類の動詞群と同類とされる。Edkins (1853 : 124).
- 31) Edkins (1853 : 128). また同項目の直後にある「Obs. (= observation [觀察])」の項目にはこの構造を英語に引きつけて解説するところがある。“[E]. g. rub smooth, rub

*dry*, which are equivalent in sense and grammatical construction to the Chinese forms, 磨光 *mú kwong*, 揩乾 *k'á kûn*.” [例えば *rub smooth* “滑らかになるまで磨く”, *rub dry* “磨いて乾かす” のように、これらは意味と文法構造の両面において中國語の「磨光」「揩乾」といった形に等しい] (Edkins 1853 : 128).

- 32) バザンの簡歴や『覺書』については小野（2005a）に要を得た記述がある。『覺書』前半部の日本語譯には小野（2005b）がある。また *Notices* の作者署名は *Philosinensis*（中國人の友）であるが、これはギュッツラフの筆名である。
- 33) Edkins (1853 : iii). また『啓蒙』が文語と口語の雙方を扱ったため紙幅の関係から口語について深い分析がなされなかった點も、おそらくはエドキンスの不滿點であっただろう。これに對してバザンの『覺書』は、文語を全く扱わず口語のみに焦點を當てた點においてエドキンスの心に適ったはずである。エドキンスの『官話文法』と『上海語文法』の原題がともに *colloquial*（口語）を含むという事實は、當時の彼が口語を重視していたことを示唆する。
- 34) Edkins (1853 : iv).
- 35) Gützlaff (1842 : 18).
- 36) Gützlaff (1842 : 20).
- 37) Bazin (1845 : 70).
- 38) ギュッツラフはエドキンスだけではなく『語言自邇集』の作者ウェイド (Thomas Francis Wade) にも影響を與えている。若き日のウェイドに中國語を教えた人物の一人がギュッツラフだったのである。關（2013 : 26）參照。

## 参考文献

- 石村廣（2011）『中國語結果構文の研究－動詞連續構造の觀點から』東京：白帝社。
- 小野文（2005a）「ルイ・バザン『中國語口語の一般原理に關する覺え書』を読む」『或問』10 : 81-92.
- 小野文（2005b）「中國語口語の一般原理に關する覺え書 (I)」『或問』10 : 145-168.
- 何群雄（2002）『初期中國語文法學史研究資料 プレマールの『中國語ノート』』東京：三元社。
- 朱鳳（2013）「モリソンの書簡についての研究—Joshua Marshman との確執」『或問』24 : 17-30.
- 千葉謙悟（2005a）「プレマール『中國語文註解』 (*Notitia Linguae Sinicae*) II」『或問』9 : 113-152.
- 千葉謙悟（2005b）「プレマール『中國語文註解』 (*Notitia Linguae Sinicae*) III」『或問』10 : 121-144.
- 千葉謙悟（2008）「プレマール『中國語文註解』 (*Notitia Linguae Sinicae*) IV」『或問』14 : 183-208.
- 千葉謙悟（2015）「官話音研究における西洋資料について」『中國語研究』57 : 1-19.



内藤正子 (1995) 「R・モリソンとJ・マーシュマンの中國語文法書」『日本中國學會報』47: 210-222.

内藤正子 (1998) 「規則と文體—マーシュマンの『中國言法』を読み解く—」『早稻田大學大學院文學研究科紀要 第二分冊』44: 53-66.

古屋昭弘 (1996) 「17世紀ドミニコ會士ヴァロと『官話文典』」、『中國文學研究』22: 118-129.

丸尾誠 (2014) 『現代中國語方向補語の研究』東京: 白帝社。

關詩珮 (2013) 「翻譯政治及漢學知識的生產: 威妥瑪與英國外交部的中國學生譯員計畫 (1843-1870)」『中央研究院近代史研究所集刊』81: 1-52.

千葉謙悟 (2013) 「馬若瑟《中國語文註解》例句來源考」『太田齋・古屋昭弘兩教授還曆記念中國語學論集』東京: 好文出版。pp. 187-196.

石崎博志・鹽山正純・千葉謙悟 (2011) 「西洋資料」『清代民國漢語文獻目錄』首爾: 學古房。pp. 293-353.

中國科學院語言研究所語法小組 (1952) 「語法講話 (九)」『中國語文』9: 22-25.

Bazin, Antoine-Pierre-Louis (1845) *Mémoire sur les principes généraux du chinois vulgaire*. Paris: Imprimerie Royale.

Coblin, South W. and Joseph A. Levy (2000) *Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language (1703) An English Translation of 'Arte de la lengua mandarina.'* Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Edkins, Joseph (1853) *A Grammar of Colloquial Chinese, as Exhibited in the Shanghai Dialect*. Shanghai.

Edkins, Joseph (1857) *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin dialect*. Shanghai: London Mission Press

Edkins, Joseph (1888) *The Evolution of Chinese Language as exemplifying the origin and growth of human speech*. London: Trübner & Co.

Marshman, Joshua (1814) *Elements of Chinese Grammar*. 中國言法 Serampore: Printed at the Mission Press.

Morrison, Robert (1815) *Grammar of the Chinese Language*. 通用漢言之法 Serampore: Printed at the Mission Press.

Philo-Sinensis [Carl Friedrich August Gützlaff] (1842) *Notices on Chinese Grammar*. Batavia: Printed at the Mission Press.

Prémare, Joseph Henri Marie de. (ca.1728/1831) *Notitia Linguae Sinicae*. MS/Malacca: Anglo-Chinese College.

Rémusat, Abel (1822) *Éléments de la grammaire chinoise*. 漢文啓蒙 Paris: Imprimerie Royale.



\* \*

作 者：千葉 謙悟

Author：CHIBA Kengo

標 題：19世紀西洋人の漢語動詞研究：以艾約瑟對結果補語分析的貢獻為中心

Title：How Europeans Comprehended Chinese Verbs in the 19th Century

摘 要：本文以語法文獻為材料來探討西洋人研究漢語的進程。本研究將焦點集中於對結果補語的發現和梳理的過程。本文從18世紀到19世紀中期的語法書入手，分析其中所見的動詞分類學說。本文發現，英國傳教士艾約瑟（Edkins）第一次成功地把結果補語結構較有系統地歸納出來了。值得注意的是，他的成果不是從官話研究中得出來的，而是從方言研究，特別是上海方言的研究中得出來的。艾氏探討上海方言的結果補語時，主要繼承了兩種先行成果。一種是法國漢學家雷穆薩（Rémusat）的看法：補語結構的後項成分意思有所虛化，並且，前項動詞一般是及物性的，而後項則是不及物性動詞。另一種，是法國學者巴讚（Bazin）和德國傳教士郭實獵（Gützlaff）的漢語詞語分類法。艾氏受到他們的啟發，脫離了“漢語＝單音節語言”這個根深蒂固的觀念而進一步對雙音節動詞進行深入的分類，終於發現了“後一個動詞限定前一個動詞的意思”這個結構。

關鍵詞：結果補語 動詞連續 語法學史 Edkins Rémusat Bazin Gützlaff